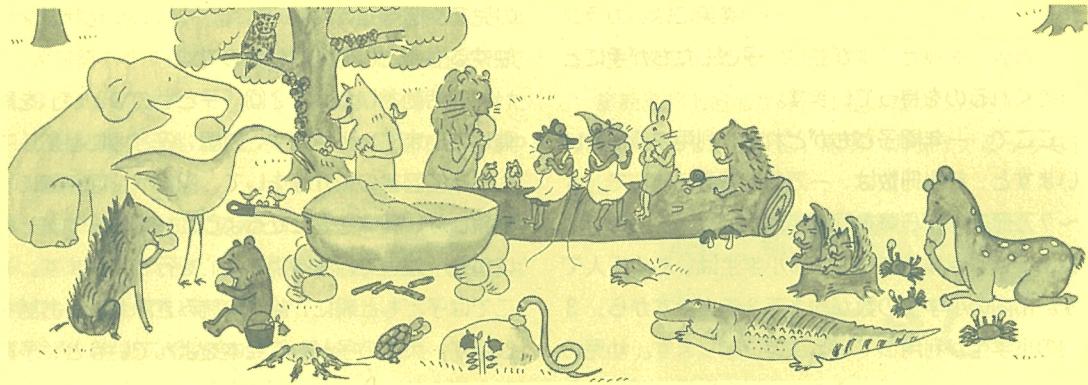


図書館たより

号数 第57号
 発行日 昭和57年10月1日
 編集行 島根県立図書館
 松江市内中原町52
 TEL (0852) 22-5725
 印刷 渡部印刷株式会社



「ぐりとぐら」より

利用時間の延長を実施して

近年情報化社会の進展、生涯教育に対する認識のたかまり等にともない、情報提供・学習の場としての公共図書館の利用が、漸次増加し、図書館は市民生活の中に定着しつつあります。

このような社会的状勢の中で、県立図書館は、より充実したサービスを行うための参考資料として、昭和54、56年の2回にわたって入館者を対象にアンケート調査を実施しましたが、その中に、閉館時刻の延長を望む声がかなりありました。

当館では、従来利用時間を9時から17時までしていましたが、生涯教育の場としての重要性にかんがみ、特に働く人々の利用を考慮して、昭和56年9月の1か月間、利用時間を1時間延長し、18時までとする試みを実施しました。

その結果は、PRが不充分であったにもかかわらず、予想以上の利用があり、また今後もこれを継続して欲しいとの声も多く聞かれました。そこで当館では、より一層充実した奉仕活動を目指し、延長にともなう予算措置を得て、昭和57年度から継続的に実施することにし、4月1日からスタートしました。

当館の時間延長は、他県でみられるようなパートによる職員などを充当するとか、館内的一部を閉鎖したりすることなく全機能でもって奉仕活動を実施している点に特徴があります。

それでは、この4月から実施した利用時間延長(17時~18時まで)の1時間について利用状況を調査しましたので、その様子を紹介いたします。

◎ 延長時間帯の入館者数について

17時以後の入館者は、4月以降おおむね着実に伸び、利用時間の延長が知れわたるにしたがい利用も増加しています。

◎ 館内在館者数について

17時現在、館内では夏休みの多い月を除いても90人近くの人々が利用しています。また閉館時刻前の17時45分現在においても50人~90人近くの人々が利用しています。

◎ 延長時間帯の館外貸出冊数について

中学生から一般の人々について調査してみると、この時間帯(1時間)で40~50冊が貸出されていますが、一番多いのは一般の人々で全体の70%近くを占め、延長したことにより勤労の方々に利用しやすくなっている様子がうかがえます。

◎ 従来の利用時間帯と延長した時間帯との比較

従来の利用時間である9時から17時までの1時間当たり平均貸出冊数と、延長した1時間当たりを比較すると延長した時間帯がすべての月とも多く55対45の割合になっています。

以上の結果から利用時間を延長した17時から18時の1時間は、特に一般の人々に利用しやすい時間帯であることが明らかで、今後とも継続して実施し、利用しやすい親しみのある図書館として読書活動に努めます。

子ども室

ご利用ください ⑤

県立図書館の「子ども室」は、一階の入口に一番近い場所にあります。白い床、白い書架、白いテーブルとイス、一部分にひいてある黒いじゅうたん、城山に向かって大きくとってある窓からは緑がしたり、落着いた雰囲気です。白い書架には、カラフルな背表紙を見せて本が並び、子どもたちが手にとってくれのを待っています。

ここで、一年間子どもがどれだけ利用するかといいますと、貸出冊数は、一万冊の蔵書に対して、6～7万冊ですから蔵書回転率はかなりいいものです。貸出できる手続きをしている小学生は、約4千人です。市内の小学生の数が約1万3千人ですから、3割の小学生が利用していることになります。幼児の登録者数は、約1千人です。幼児の登録と貸出は年々多くなっています。多くなった時期は、県立図書館で親子読書運動を開始した時期と一致します。親子読書運動の浸透と、絵本の充実により、利用が増えたと推察できます。読書による人間形成の入口にいる幼児が、親のぬくもりの中で絵本をよんでもらっている、そういう体験をもつ子が多くなったことはうれしいことです。

児童奉仕の中で一番大切なことは、本を選ぶことではないかと思います。ただ子どもが喜ぶから、子どもが利用するからという理由だけで本を選んでいたのでは、本の質は低下するでしょう。本についての情報をわずかしか知らない子どもにかわって、最も質の高い本を選んで、それもできるだけたくさん選んで、その中から自由に選択されることです。図書館に置いてある本は良い本だ、すすめられている本だと信頼されるように、十分検討し、選択し、幅広くあらゆる興味に対応できる図書を選んでいます。

県立図書館の任務として、子どもに直接奉仕する以外に、県内の児童図書センターになるべき役割があります。子どもの本や読書に対する調査、研究のための資料が380冊あります。その中には雑誌「赤い鳥」の複刻版もあります。児童書は一般書と異なり、消耗がはげしく、どこの図書館でも保存しないもの

です。しかしここで保存しないと児童書は消滅してしまうでしょう。そこで、少しずつですが絶版になったもの、出版の古いもの、話題になったものを保存しています。児童書は、それが発行された時代の児童文化を知るだけでなく、一般的な文化状況を反映するものとして大切なものです。

対外活動として、年2回「子どものつどい」を開催しています。人形劇や、映画、子どもに参加してもらって図書の紹介等をして、図書や、図書館により親しみ、興味をもたせるようにしています。それに毎週「親子で絵本をよむ会」を行っています。そこでは子どもと親に、絵本の読みきかせや、お話をします。大勢の子どもに絵本をよんでいると、予期せぬ反応や、素直なつぶやきが聞かれて、とても勉強になります。

月一回「子ども室だより」を発行しています。子ども室の行事や、利用状況を知らせたり、図書の紹介をのせたり、投書箱に入っている子どもの感想や意見をのせて、子ども同志の情報交換の場にもしています。投書箱には毎月たくさんの意見が入っています。その大半の意見は、「図書館にはおもしろい本がたくさんあります。これからもいっぱい読みます。」という声です。読みたい、知りたいという欲求をもって、短い子ども時代に限られた時間を利用して図書館に来る子どもたちのために、最善、最高の本をたくさん用意してやりたいものです。

○卒業式が終ってからここにきて良かった。
とっても思い出にのこる。中学の卒業式の時も、もう一度ここにきたい。そしてその時も同じ場所に同じ本があつて欲しい。

○本を読むようになって、人のことを思ってあげたり、少し心が成長したように思う。

——県立としょかん

「子ども室」だより

とうしょ箱から

こどもの本

11

おばけのバーバパパ

アネット・チソン テイラス・テイラー 共著
偕成社

フランスの家の庭で生まれたバーバパパは、大きすぎるために動物園に入れられ友達を求めてさまざまな努力をするが、結局は動物園を追い出されてしまう。町に出たバーバパパは火事場で人を助けたり、動物園から逃げたヒョウをつかまえたりで町中のの人気者になる。

自分の姿を自由に変えられるという奇想天外な主人公の行動は、子どもの冒険心を満足させて、おばけファンにしてしまう。

明るい色彩の線描きの絵は軽妙で、ストーリーにマッチしている。

いたずらきかんしゃちゅうちゅう

バージニア・リー・バートン 文 絵
福音館書店

ちゅうちゅうは真黒でぴかぴか光ってきれいなかわいい機関車。ある日、重い客車をひくのがいやになり、自分ひとりだけならもっと早く走れるし、みんなはきっと感心してほめるだろうと逃げ出す。踏み切りも信号も無視して野を越え、はね橋を渡り勝手に走って行ったが……。

子どもの奔放な行動を機関車にたくしたスピード感のあふれる物語のおもしろさが子どもをとらえて離さない。

だるまちゃんとてんぐちゃん

加古里子 文 絵
福音館書店

だるまちゃんはてんぐちゃんの持っているものが次々と欲しくなる。おとうさんのだるまさんが出してくれるものは気に入らず、自分で工夫していく。その子どもらしい発想が楽しく、漫画風な絵とうまく調和している。他に、「だるまちゃんとかみなりちゃん」「だるまちゃんとうさぎちゃん」がある。

かにむかし

木下順二 文 清水崑 絵
岩波書店

「かにどんかにどん、どこへゆく」「さるのばんばへあだうちに」方言を巧みに生かした獨得の語り口で、昔話の素朴さをだした「さるかに合戦」。

墨絵風のおおらかなさし絵は昔話にふさわしく、力強さがある。とくに、馬場へのダイナミックな行進は圧巻である。



プレーメンのおんがくたい

ハンス・フィッシャー 絵 瀬田貞二 訳
福音館書店

年とったロバはお払い箱にされると思い、家を出てプレーメンの町へ出かける。途中でやはり年とったイヌ、ネコ、ニワトリに出あいさそいあわせて出かけた。途中で日が暮れ、やっとたどりついたのはなんとどろぼうの家だった……。

有名なグリムの昔話を、リズミカルな線でいきいきと描いている。白をバックにあざやかな色が美しく、表現豊かな楽しい絵本。

毎週水曜日の午後になると、図書館のフロアに幼児のあどけない声がひびきます。「親子で絵本を読む会」に参加する幼児たちが、親に連れられて来るからです。

県立図書館と幼児の出会いがそこにあります。

今年度から「親子で絵本を読む会」として、親と幼児・小学校低学年を対象に毎週水曜日、午後3時～4時まで絵本の読み聞かせを実施しています。

テーマを考えて「入門絵本」「物語絵本」「昔話絵本」「知識絵本」と大まかに分類し、その視点から一ヶ月繰り返し読みつづける本と併用する本を決めて読み聞かせをしています。その後、読んだ絵本の見方、考え方を親に話し、1か月の終りにはテーマごとに焦点をしぼって絵本の紹介や、読み聞かせのポイントを話し、共に楽しんでもらうようにしています。

子どもたちは、じゅうたんの上にすわるとしぜんに絵本との出会いを待つせいになります。子どもと絵本の出会いの中から、4月・5月の繰り返し読みつけた「しろくまちゃんのほっかけーき」の1コマを紹介します。

ホットケーキの材料作りのとき「ひとつ ふたつ 三つ たまご ぽとん あわれちゃった」と読むと、ある幼児が「あっ、おかあちゃんにしかられる。」と、すかさず悲鳴に近い叫びをあげました。まるで自分が失敗したように…。お母さんたちは思わずふき出してしまいました。

子どもは、このような体験をしているのでしょうか。その自分の生活体験が「しろくまちゃん」の行動と重なってイメージ化され、思わず叫び声が出て来たのです。このように登場人物と一体となって行動できる幼児の心を大切にしたいものです。

子どもの反応が著しかったところは、何といってもしろくまちゃんがホットケーキを焼く過程です。フライパンに材料を入れてから、しだいに焼け始め、

できあがるまでが擬音、擬態語で見事に書かれています。

「ぼたあん、どろどろ、ぴちぴちぴち、ぷつぶつ、やけたかな、まあまだ、しゃっ、ぺたん、ふくふく、くんくん、はい できあがり」

子どもはそのことばにつれて頭の中にホットケーキを焼いていき、においまで感じてくるようです。

子どもは「はいできあがり」のあと、最初の「ぼたあん」にもどっていきます。子どもの目が動くのです。2回めからは、子どもたちもいっしょに「ぼたあん」「どろどろ」「ぴちぴちぴち」…。と歌でも歌うようにつぶやいています。2回繰り返すとホットケーキが頭の中で2まい焼けるのです。3回繰り返すと3まい焼けるのです。回を重ねるにつれて白くまちゃんは人気者になり、読む者は「しろくまちゃんのおばちゃん」になってしまいました。5月の最終日は、3回繰り返しで次へ進もうとすると、「もう1まい焼こうよ。だっておさらには4まいあるもの。」と、子どもの方から4まいを要求してきました。

このようにして「できた　できた　ほかほかのホットケーキ」のおさらには4まいのっているページへ移っていくのです。子どもが繰り返し絵を読みイメージを描いて楽しむ姿がそこになります。

絵本は、大人が子どもに読んでやる本であり、子どもが絵を読んで喜ぶ本であり、子どもがその物語の中に入れて楽しむものです。聞いている子どもの表情には、腹の底からわき上がる喜びが見られます。それは読み手にも伝わってきます。こんな生き生きとした喜びの体験の繰り返しが、絵本好きにしていくのではないでしょうか。絵とことばが一体となって子どもの世界を広げ、夢をふくらませる絵本に出会わせてやりたいものです。

子どもと絵本の出会い 「親子で絵本を読む会」より

NEWS

●親子読書講演会開催

当館では、昨年にひき続き親子読書をテーマに松江市・大東町において9月24日講演会を開催した。講師は福音館書店社長・松居直氏で「家庭教育と絵本」についての示唆に富んだ話があり盛会のうちに終えることができた。

石見会場（桜江町・金城町・益田市）においては来る11月1日2日に、幼児と文学研究所所長・佐藤宗夫氏を迎えて「子どもの心を育てる読書」について親子読書講演会を開催の予定。